首都待機生活中にお世話になったホテルスタッフ。

隊員生活最大の試練

青年海外協力隊 2018 年度 1 次隊　派遣国：トンガ王国　伊藤有未（三郷市）

　最後に待ち受けていた隊員生活最大の試練は、帰国でした。私は現職参加であり、派遣期間は 1 年 9 ヶ月。3 月 19 日に任国を出発し、翌日には本邦到着予定でしたが、今回のコロナ騒動で事態は一変。予定していたフライトの欠航、に始まり、経由地となる近隣諸国が次々と入国制限を発表。トンガも国家封鎖通知を発令し、事実上の鎖国状態となりました。このトンガ政府の迅速な決断により 4 月初めの時点でトンガでの発症は確認されていません。発症者がおらずとも国家封鎖通知を出し、全国民が外出自粛となりました。食料・生活用品店、銀行等の生活基盤となる施設や会社は時間短縮営業、飲食店は休業、学校も休校になりました。街には警察と軍隊が常

隊員は全員避難一時帰国。到着時は、勿論マスク着用で。

時巡回。道端で行き先を質問され、外出の自粛を促されることもありました。他には、集会は禁止、建物への出入りは人数制限。列を作るような場合には、間隔が空けられたテープの足位置での待機が求められる等の徹底ぶりでした。

この終わりの見えない待機生活で募る不安。そんな私の心配をよそに、「トンガは大丈夫。皆お祈りをしているから。」「トンガの方が日本よりも安全。トンガに嫁いでここに住み着きなさい。」と冗談交じりに励ましてくれるトンガの人たちには救われました。そして、トンガ、経由地の豪州、日本大使館やJICA 関係者のご尽力により、2 週間遅れて無事帰国することができました。

帰国に際し、各国のコロナ対応を身をもって体験することになりました。世界的に猛威を振るう状況から早期対策に乗り出したトンガ政府の対応を称賛します。重症患者の対応が難しい脆弱な医療体制を認識し、事前に出来る限りの予防に努める。国家封鎖通知に対してトンガ国民が協力的に動く姿勢と危機感は、今の日本人に必要な心持ちなのかと感じつつ、トンガを思い出しています。

最後に。待機生活や自己検疫と忍耐が続く帰国となりましたが、時間の使い方やメンタルコントロール、最後まで協力隊らしい経験ができたと思います。

国家封鎖通知後。首都にある 1 番大きなマーケット前も閑散としています。